妙泉寺便り

第４号
発行所
編集：妙泉寺住職
副住職
岡山市南区古新田

秋山自雲霊神大祭
しゅうざん　じうん　れいじん

八月一日（木）
十九時より本堂にて盛運祈願祭
二十時より自雲堂前にて大祭

毎年恒例の「秋山自雲霊神大祭」が近付いて参りました。

秋山自雲居士は三十八歳の頃から悪質な痔病に悩まされ「死後は痔病で苦しむ人々を救いたい。」と誓願され、四十五歳の若さで他界されました。

以降は痔病だけでなく、様々な病を治癒する霊験あらたかな神として信仰されており、当山においては毎年八月一日に秋山自雲居士を偲ぶと共に、病で苦しむ人々の為、そして暑い夏を無事に乗り切られるよう「夏祭り」として定着して来ました。

本年も八月一日（木）に開催致します。

「かき氷」や「金魚すくい」に加え「から揚げ」や「フライドポテト」等の屋台も出店予定です。皆様の御参加をお待ちしております。是非、ご家族御揃いで御参拝下さい。

また例年通り、小学生までのお子様には行灯の習字をお願い致します。

習字をしてくれたお子様にはもれなく、後日お菓子の詰め合わせをプレゼント致します。

寺宝紹介

当山にもいくつかの寺宝がありますが、その内の二点を紹介します。

①岡本常彦

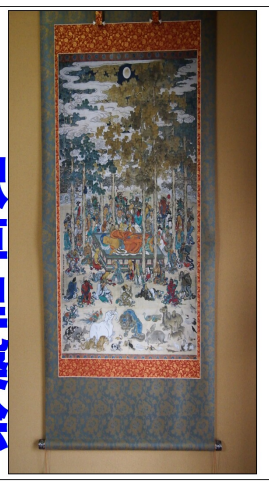
杉戸絵

当山本堂から、裏の位牌堂に通じる扉には絵が描かれておりますが、この絵は幕末から明治に画家として活躍した岡本常彦氏のものです。

文化十三年（一八一六）水江（今の倉敷市）生まれ。京都の著名な日本画家・岡本豊彦の甥で、自身も叔父の豊彦に師事して絵を学んだ後、長崎に遊学。のちに倉敷に帰り活躍し、倉敷市曽原の一等寺（真言宗御室派）などの寺院には多くの襖絵が残っています。

当山の杉戸絵の由来は分かりかねますが、昭和五十七年の本堂落慶以前からあったと推測されます。

②長谷川等伯



釈尊涅槃絵

本物は京都の本山・本法寺に所蔵されています。

長谷川等伯は慶長四年（一五九九）に安土桃山時代から江戸時代初期にかけて狩野永徳らと並び、安土桃山時代を代表する画人でした。

ちなみにこの画は、お釈迦様の入滅の様子を描いており、表装を含めれば高さ十メートルに及ぶ大涅槃図で、完成時に宮中で披露された後、等伯によって本法寺に寄進されました。首を上下左右にゆっくりと振らなければ全貌を見ることは出来ません。その迫力は見る者を圧倒します。

その画を細かいところまで模写した縮小版が現代によみがえり、現在、「釈尊涅槃図」として当山に御座います。

様々な資料を見る良い機会です。皆様も当山へお越しの際には、先人方の功績に想いを馳せてはいかがでしょうか？

揚げ法事とは

お寺の御宝前で行う法事のことをいいます。

故人様の御供養を御本尊にお願いし、そしてその誠を捧げる事により、より一層ご先祖様の有り難さを実感することに意義があります。

本来は皆様の御自宅でされるのが本義ですから、お供物・仏様のお膳・お花等々を持参して戴き、お茶を出されるのも御当家でお願い致します。後片付けもして戴きます。

この一つ一つの事も、故人様への御供養になりますのでどうか御理解下さいますようお願い申し上げます。

詳しくは当山までお問い合わせ下さい。

こぞうくんストラップ

日蓮宗新聞社（東京都大田区）には宗門のゆるキャラ「こぞうくん」がいます。愛嬌たっぷりで可愛らしいこぞうくんのグッズも色々ありますが、当山では、こぞうくんのストラップを三五〇円で販売しております。

種類も様々で、団扇太鼓バージョンや読経バージョン、纏バージョン、更には毎年恒例の干支バージョン等も御座います。お参りの際には是非とも

お土産にいかがでしょうか？

お盆の由来

お父さん・お母さん・お祖父さん・お祖母さん・・・今を生きる私たちの命は多くの「絆」の中で紡がれてきた「命の糸」です。

お盆の由来は中国より伝わった「仏説盂蘭盆経」にあります。お釈迦様の弟子で「目連」という方がいました。目連は神通力（超越した能力）を使い、亡くなった母を想い、死後の世界を見ました。

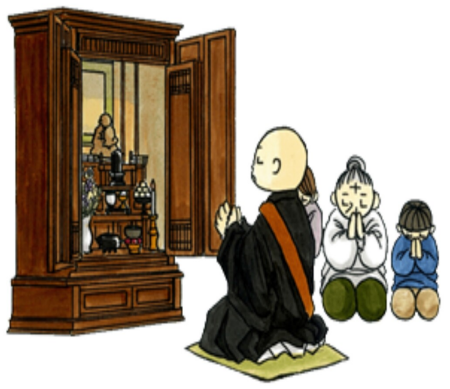
ところが目連は、母が餓鬼道に堕ちた姿を見つけます。目連は神通力を使って母を助け出そうとしましたが、どうやっても救うことが出来ない。

目連は涙を流しながらお釈迦様に問いました。「なぜ私の母が餓鬼道に堕ちたのでしょうか？」お釈迦様は答えます。「母君は、お前を愛するが故に他の者に施すことが出来ず、餓鬼道へ堕ちたのだ。目連よ、母君を救いたいのであれば、雨安居（うあんご）（当時の約百日間の結界修行）を終えた僧達と共に、母君だけでなく餓鬼道で苦しむ総ての人々の為の法要を行いなさい。」

こうして目連は母を救う事が出来、大いに歓喜しました。その嬉しさを雨安居を終えた僧たちと共に全身を使って表現した姿が、現在の盆踊りの始まりとされています。

【自分さえ良ければいい。】それが餓鬼の心です。お盆では、世の中で苦しむ総ての人々に目を向けることで、自らの心の餓鬼を救う修行の期間なのです。

※お墓参りは家族揃って行きましょう。



施餓鬼法要

八月十八日（日）十三時より、本堂にて施餓鬼法要を厳修致します。

施餓鬼では私たちの布施修行（施しをする修行）の功徳が欲望を抑えて、ご先祖様を成仏へと導くのです。

亡き人に代わり、追って善を積み供養するから「追善供養」といい、この功徳によって迷える魂にも飲食を施し、餓鬼を供養するのです。

私たちの中にも餓鬼の心はあります。「あれも欲しい、これも欲しい、まだ足りない。」と傷つけ合い、奪い合う、それが餓鬼の心です。私たちは次の三つの心を育てることで、餓鬼の心を抑えることが出来るのです。

①感謝の心

太陽が昇り、朝日で目覚める「今日も一日、この命を大切に頑張ります。」自分が生きているのは、多くの命の中であるからこそ、総てに感謝する。何事も素直に「ありがとう」と言える心。

②反省の心

今日一日の自分を省みる。厳しい現代社会や人間関係において自分に何が出来たか。時として素直に謝れる心。

③施しの心

お金や物品だけでなく、目には見えないものを施す。積極的に挨拶をする・笑顔で接する・譲り合える心を持つ。食事も独りでは寂しいが、二人・三人と集まれば、その喜びでより一層美味しく感じられる。仏様の心も同じく、苦しい時に苦労を分け合えれば乗り越えられる。嬉しい時に分け合えれば倍になって返って来る。苦楽を共にすること、施しの心を育てましょう。

お盆を迎えるにあたり

宗派や地域でそれぞれ違いがありますが、地元では床の間に祭壇を設け、盆提灯や六角灯籠などを飾り、庭に精霊棚を奉ります。

また、故人の霊魂がこの世とあの世を行き来するための乗り物として、精霊馬と呼ばれるキュウリやナスで作る動物を用意します。足に見立てた割り箸などを差し込み、馬と牛として祭壇や精霊棚に供物とともに置きます。キュウリは足の速い馬に見立てられ、あの世から早く家に戻って来るように。そしてナスは歩みの遅い牛に見立てられ、この世からあの世に帰るのが少しでも遅くなるように、また「供物を牛に乗せてあの世へと持ち帰ってもらう。」との願いも込められています。

故人の四十九日法要が終わってから最初に迎えるお盆を新盆（しんぼん、にいぼん、あらぼん）等と呼び、特に手厚く供養する風習があります。これも宗派や地方によって異なりますが、新盆のお宅は仏壇、もしくは精霊棚の脇に新盆提灯を立てたり、新盆のお宅にそういった提灯を贈ることが習わしとなっています。

当山では施餓鬼の際に合同で供養致しますので、お寺からお届けした新盆

編集後記

この度、ようやく「妙泉寺便り」の第四号を皆様の元へお届けする事が出来ました。いざ書いてみると次々と書きたいことが増え、二面で納まるか心配になりましたが、取捨選択の末、無事に発行まで至りました。

皆様の中で「こんなことを書いてみてはどうだろうか？」というご意見ありましたら、当山までご一報下さい。

「是非私も記事を書いてみたい。」という方も大歓迎です。

副住職・記